

2016年 司法試験

合格の形

辰巳
謹製

辰巳 100人合格体験本

合格者のリアルな軌跡を知ることが“成功への道”

未修者 1回合格

既修者 Revenge

既修者 1回合格

予備試験合格・司試験合格

未修者 Revenge

選択科目全科目

特集 1：第 11 回司法試験 一発合格者座談会

特集 2：第 11 回司法試験 再チャレンジ合格者座談会

■同時掲載

- ・2016 年司法試験合格者 100 人に聞きました
- ・第 11 回司法試験合格者アンケート結果発表
- ・巻末特集：2016 年最新合格者による辰巳・司法試験合格者講義 全 13 タイトル掲載

辰巳の 100 人合格体験本を 利用された方の声

～前略～

また、辰巳合格体験記 100 人本は合格にとって非常に役立ちました。毎年この規模で無料配布されているものは他にはなく、合格者の方々の現実的な試験対策を知る上で、この上ない教材となりました。ぜひ一読するだけでなく、マーカーを引いて、1 年通じて読むようにされたらいいと思います（私もそうしていました）。

—本書 File no.32—から抜粋

～前略～

私は初受験までの勉強と 2 度目の受験とで勉強の方法を大幅に変えました。リスクがあることは承知の上で、変えるという選択をしました。その理由は、初受験の際に、会場で全く歯が立たず茫然自失となった経験から、二度と同じ経験をしたくないと思ったからです。そして、その方法選択に当たっては、自分の不合格となった理由を詳細に分析し、それを克服するための方法を合格した友人、

辰巳の 100 人体験本などから情報を集め、

自分に合った方法を模索しました。

—本書 File no.52—から抜粋

辰巳法律研究所は毎年 100 人分の合格者の軌跡を 1 冊の体験記として刊行しています。リアルな合格方法論が満載です。ぜひ一読ください。

無料
配付

司法試験 / 答練 Standard
辰巳法律研究所

Tokyo・Yokohama・Nagoya・Osaka・Kyoto・Fukuoka
提携校 Okayama

受験歴
新試験 1回

すが 聡子さん

東京大学法学部
成蹊大学法科大学院 2013年入学・2016年修了
【受講歴】2015年
スタンダード論文答練（福田クラス/第1・第2クール）
全国公開模試 他

勉強すべき内容を絞り込んで、きちんとこなすことが大切です。

- 福田先生から論文で点を取るコツや重要論点の書き方を学びました。
- 基本書を通読しても答えは書けない。問題を使った勉強で具体的に学べる。
- 基本事項を覚えていないと規範が出せず答案が書けないので、基礎が大切。

1 司法試験の受験を決意した経緯

資格を取って仕事をしたかったことと、法律の勉強が論理的で自分に向いていたこと、文章を書いたり読んだりするのがとても好きだったことから決意しました。

2 法科大学院受験前の学習状況（法律学習）

大学の法学部で勉強したほか、他の予備校の基礎講座、論文講座、答練を取っていました。

3 法科大学院入学後の学習状況（法律学習）

受験対策を集中してしたのは3年の6月からで、普段はロースクールの授業の予習や課題をしたり、ロースクールでゼミに参加したり、短答を解いたりしていました。

4 受験対策としてとった辰巳講座

スタ論スタート、スタ論第1クール、スタ論第2クール、全国公開論文模試、選択科目答練、直前早まくり講座、直前フォロー答練です（ほぼ福田クラス）。

スタ論スタートでは、辰巳専任講師・弁護士の福田俊彦先生から論文の書き方の基本や、問題文の分析の仕方、科目別のおすすめの教材や、「書写」などの普段の学習法、短答の勉強の仕方と、目指すべきラインなどについて毎週教えていただき、解説講義を聞いて、採点表を読んだら答案を書く勉強をしました。短答セレクトという先生が選んだ重要な短答問題を一緒に解きながら、短答の勉強も並行して行うことができました。論文で点を取るコツや、特に重要な論点の書き方、効率の良い勉強の進め方を知ることができ、とても効果があったと思っています。

早まくりは、直前期に、公法系、刑事系、民事系について、出題が予想される論点と予想問題についてひたすら解説を聞く講座です。今年は、いくつもの科目で論点がかなり近い形での中し、見覚えのある問題が多かったので、安心して本番でも解くことができとてもうれしかったです。直前期は不安から、細かい論点や応用的な勉強をしてしまったり、何の勉強をしていいか分からなか

ったりするので、この講座で非常に重要な論点について再確認し、この講座の教材を中心に学習することは非常にお勧めです。そのためには、この講座の開講前にそれまでの答練や自分の勉強を一通り済ませておくことが必要です。

5 受験対策としてとった私がやって成功した方法

スケジュールについて書きます。短答は、目標ラインになるまでは半分くらいの時間をかけてやっていました。目標ラインは民法刑法で8割、憲法で6、7割とれるくらいだったと思います。スタ論の第1、第2クールをペースメーカーにして民事系の週は、3科目問題集を復習したり、予備試験や旧試験の過去問を回したり論文の過去問を見直して、答練の前の2日間は辰巳の趣旨規範ハンドブックで暗記をしていました。答練の後には、繰り返し復習しました。

答練は、全範囲を網羅できるというものではないので、答練の勉強の他に、問題集、過去問などで論点は勉強することが必要です。問題を使って勉強することで、どういときにどういう論点を書けばいいのか、どの程度の内容を書けばいいのか、具体的に学ぶことができます。また、重要な論点は繰り返し出てきますし、ほとんどすべての論点を一通り網羅することができます。基本書を通読しても、答えは書けるようになりません。

また、過去問を1から起案する勉強は全くしませんでした。過去問の合格ラインは、5、6割だと思うのですが、自分でそれは分からないですし、受験時にそれぐらいのレベルに達していることが目標なので、秋や冬の時点では、新司の問題がいきなり初見で処理できる能力より、基本的な問題を確実に処理できる能力の方が必要だと思ったからです。過去問は確かに難しいですが、完全に解けるレベルは、合格水準よりはるかに高く、そこを目指して勉強すると量が多すぎて挫折します。難しい問題は、基本論点の組み合わせや基本判例のアレンジなど応用です。基本論点についてだけでも自分なりに書いてこれれば一応の水準の評価は得られると思います。平成10年以降の民事系の予備、旧試験の過去問と5年分の新試験の過去問、公法刑事法のすべての新試験の過去問と、自分に合ったお気に入りの問題集各科目一冊を、何度も

何度も繰り返し勉強しました。繰り返すうちに早くできるようになり時間がかからないようになります。答練は、事前に、気を付ける点を意識しておくこと、返ってきた答案を見て復習をしっかりすること、添削のコメントを見て自分の書き方の悪い点を知り、改善していくことが大事です。

6 受験対策として私が使用した本

(1) 辰巳の趣旨規範本

論文の過去問や問題集を勉強するときに、出てきた論点について参照するという使い方と、答練やテスト前に暗記するという使い方をしました。星印のついている規範を暗記して、出てきた判例を百選で見っていました。

(2) 合格答案を基本から速攻で書けるようになる本

この本は使い込み、何度も繰り返しました。趣旨規範ハンドブックと対応した解説本ですが、重要な論点について解説が分かりやすく載っていて、読みやすく、覚える部分が太字で書かれているのですが、その分量は少なく、過去問などの一部を使ってとてもよかったです。これだけで、司法試験の中で頻出の論点はほとんどきちんと合格に必要な十分な理解と書くべき部分の暗記が済むと思います。論文の答案に書くときの書き方が分かります。

(3) 短答過去問パーフェクト

福田クラスで教えていただいた重要問題から解く、重要肢から解くやり方で、勉強しました。間違えた問題はチェックして繰り返し、4回くらい解きました。

(4) 論文過去問集

辰巳の科目別のを使っていました。とてもまとまっていて、分かりやすかったです。いきなり解こうとしても難しくて解けないので、問題文を読んで、辰巳で教わったやり方で分析してマーキングして、事実を図にしたら、論点表を見て、こういう問題だとこういう論点の問題になるのか、と確認しました。その後、答案構成と解説を見て、条文と判例を調べました。その後は、繰り返し答案構成と解説で勉強しました。解説がとても短くて、読みやすいので使いやすかったです。出題趣旨と採点実感は太字の部分を中心に読みました。

(5) **勉強方法**は、スタ論福田クラスの総論レジュメに全て従っています。市販の福田先生の、「絶対にすべらない答案の書き方」という本に、ほぼ同じ内容がのっています。

7 アドバイス

私は、直前模試ではC評価でした。しかし、短答に限れば、かなり上位でA評価でした。そこで、司法試験は、短答がどれだけ良くても結果に反映する影響は小さいと

感じ、また、論文は短答と比べればまだ点を上げられる科目が多いと考え、勉強が手薄だった選択科目、論文模試の成績がとても悪かった刑事訴訟法の論文対策を直前期はずっとしていました。

本番も、短答の成績は3000番台でしたが、合格することができました。短答は、足切りにかからなければいくらいに考えて、なるべく早く合格ラインに達せられるようにしたら、後は論文の勉強をしていけばよい状態にすべきです。

また、私の失敗としては、行政法で違法性の承継の規範を全く忘れていたのと、取締役と会社の関係を規律する会社法330条の条文を忘れていて、書けなかったことがあります。基本的な論点について基本事項を覚えていないと、そもそも規範が出せず答案が書けません。そして、基本的なことこそ、自分が分かっていると思い込んでしまいおろそかになってしまい、本当に暗記できているかチェックできていないことがあります。難しい勉強に時間をかけるより、基礎的な事項を本当にきちんと理解できるまで繰り返し勉強してください。

そして、勉強のベースがどの科目もまんべんなく進んでいるか、偏りなく勉強できているかノートなどに計画をメモして、配慮してください。苦手科目を重点的に勉強しても良いですが、極端に手薄な科目がないようにしてください。

辰巳法律研究所 受講歴

2015年

スタ論スタート 2016

スタンダード論文答練（福田クラス / 第1クール）

スタンダード論文答練（福田クラス / 第2クール）

選択科目集中答練

直前早まくり

福田クラス 直前フォロー答練

条文を引かないで覚えているものを出すのが重要だと思います。

(5) 民事訴訟法

使用した教材は、趣旨規範ハンドブック、解析、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本です。アウトプットを意識したインプットメインで、解析を利用して旧試を何度も解くようにしていました。

(6) 刑法

使用した基本書等は、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本、刑法事例演習教材、自作ノートです。刑法に特徴的な勉強方法としては、プラス・マイナスの評価を意識しました。

(7) 刑事訴訟法

使用した基本書等は、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本、古江、自作ノートです。古江は自分にはあまり合いませんでしたが、受験生の大半が使うのでそこに載っている論点はすべて潰しました。

(8) 経済法

使用した基本書等は、「独占禁止法」（金井編、弘文堂）、自作ノート、ケースブックです。ケースブックはあてはめの事情やどのような効果が生じるかなどを学びました。やった問題は過去問のみで、問題集は不要です。定義などが完璧であることが前提として、どのようなメカニズムで競争に良くない影響が発生するかをすべての事情を使って流れ良く書いていくのは非常に難しく、実際に書いて練習する必要があります。合格者や模範答案などを参考にするといいと思います。選択科目は司法試験の一番最初の科目であり、一番緊張する中で解くことになるので、得意な科目にしておく必要があります。もっとも、勉強量は最小限にすべきで、選択科目で超上位を狙おうとするのは得策ではありません。勉強するなら民事系を。

7 自己の反省点を踏まえ、これから受験する人のアドバイス

司法試験は本当に過酷な試験で、少しのミスでパニックに陥り、わかるはずの問題が解けなくなります。私も刑法は全国公開模試の順位が2桁程度でしたが、本番でパニックに陥り答案構成できなくなりました。しかし、なんとしてでも絶対に受かるという強い気持ちを持っていたので合格することができました。そのため、本当に最後の最後は気持ちだと思います。受験生の皆さんは、司法試験を恐れず、しかし全力で、絶対に受かるという気持ちで残りの時間を勉強しましょう。頑張ってください。陰ながら応援しています。

辰巳法律研究所 受講歴

2016年対策

スタンダード論文答練（第2クール）

スタンダード短答オープン（第2クール）

全国公開模試

司法試験総括

強を省略すれば時間を確保できるか、を自問自答していました。そして、この傾向は直前期は特に顕著であったと思います。

(2) 計画表

私は、あまり細かい計画を立てるタイプではありませんが、ロースクール3年後期から司法試験の勉強に関しては1週間単位で計画表を作成していました。具体的には、各曜日にどの科目の何（ex. 刑法事例演習教材の問題1問など）をするのか書ける紙をプリントアウトし、そこに授業や飲み会などを考慮して、確保できる時間内でやるべきことを書き込んでいました。そして、必ず予備日を設定し、一週間のやり残しを終わらせる日にしていました。もっとも、私は計画通りに課題が終わっても、予備日を遊びに使ったり、リフレッシュする時間には使いませんでした。どんなことをしてでも一発で司法試験に合格したかったのだ。また、計画の具体的内容については、自分の弱点や科目の特性を考慮して決めていました。

6 受験対策として使用した本及び勉強方法

(1) 憲法

使用した教材等は、百選、「判例から考える憲法」（法学書院）、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本（辰巳）、条文判例本（辰巳、短答の統治部分のみ）、自作ノート（先輩が作成したものを加筆修正した上で、統治以外の短答知識もこれにまとめていた）です。憲法特有の勉強方法としては、原告被告私見の主張を出来るように判例をよんだり、評価の仕方・文言を盗んだりして、自作ノートにまとめていました。また、条文判例本では過去に出題されたところを重点的に勉強しました。短答の勉強方法としては、過去問のみをするタイプと過去問だけでなく条文判例本などで知識を入れるタイプがあると思います。自分は後者で予備試験の短答に落ちた理由の一つであると思うのですが、後者の人は広い知識を確認することを重視しすぎ、重要な部分を落としてしまう傾向があるのではないかと個人的に思っています。そのため、後者のタイプの人は重要な部分を特に意識する必要があると思います。

(2) 行政法

使用した教材は、「事例研究行政法」（日本評論社）、櫻井・橋本先生の教科書（弘文堂）、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本、趣旨規範ハンドブック、百選です。行政法特有の勉強方法としては、原告適格と処分性などの書き方をぶんせき本の上位答案を見ながら学んだことです。基礎知識も重要ですが、行政法は時間が非常に足りない科目だと思うので書き方をマスターしアウトプットの時間を最小限度しました。

(3) 民法

使用した教材は、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本、民法総合・事例演習（有斐閣）、趣旨規範ハンドブックです。問題集は問題を選び、直前期に3周しました。

(4) 会社法

使用した教材は、論文過去問答案パーフェクトぶんせき本、ロースクール演習会社法、ロープラ、趣旨規範ハンドブックです。過去問でどの程度のレベルの条文を引くのかを学び、その条文はほぼ暗記しました。会社法のコツは、勉強時に条文を引きまくり、本番ではいかに

さかべ ゆうや 坂部 裕哉さん

中央大学法学部卒業
中央大学法科大学院 2014年入学・2016年修了

【受講歴】2016年対策
スタンダード論文答練（第2クール）
スタンダード短答オープン（第2クール）、全国公開模試 他



受験歴
新試験 1回

スタ論の採点表から逆算して学ぶ司法試験の点数の取り方

- 司法試験は点取りゲーム。スタ論はどこに点数が振られているかを勉強する手段。
- スタ論は採点表の当てはめ部分が個別具体的で逆算して勉強するのに役立つ。
- 受験勉強は限られた時間を有効活用し、自己の得点を最大化することが最重要。

1 司法試験の受験を決意した経緯

私は、親の仕事の関係から昔から広く社会のために働ける職業に就きたいと考えていました。そして、弁護士ならそれが可能であると思い、受験を決意しました。

2 法科大学院受験前の学習状況

私はいわゆる「炎の塔」出身者ですが、学部1年・2年の頃は勉強方法がよくわからずあまり勉強していませんでした。本格的に勉強を開始したのは3年になってからです。正直後悔しています。各科目の論文演習の書籍を潰したり、辰巳の趣旨規範ハンドブックを何回も繰り返して基礎を固めました。法科大学院の受験では、運よく論点が当たりまくり、中大ロースクールの授業料全額免除を取れてしまいました。本当にラッキーでした。

3 法科大学院入学後の学習状況

実力がないのに全額免除を取ったことで勘違いし、ダラケまくったロースクール生活を過ごしていました。「司法試験とかなんとかなるでしょ！余裕っしょ」という考えでロースクール時代のほとんど過ごしていました。しかし、司法試験の半年前に、あまりの怠惰具合に、先輩の弁護士と同期の優秀な友達に真夜中の新宿三丁目の居酒屋で2時間以上お叱りを受けて、それ以後本腰を入れて受験勉強し始めました。人に怒ることは反感を買うことが多く、ほとんどの人が怒ったりしないにもかかわらず、親身になって自分を叱ってくれた先輩と友人には本当に本当に感謝しています。いい先輩と友人と出会えて幸運です。

4 受験対策としての辰巳の利用方法

(1) スタンダード短答オープン第2クール（以下、「スタ短」）

私は、論文はある程度書けるが短答が苦手というタイプの人間です。前年の予備試験は短答式試験で切られるという屈辱を味わったので何としてでも短答を伸ばすことを目的に、スタ短を取りました。ただ、スタ論・スタ短を取るのは他の勉強との兼ね合い的にかなりヘビーでした。なので、短答が苦手でない新卒者にはスタ論・スタ短の二つ取るのは絶対におすすめしません。

(2) スタンダード論文答練第2クール（以下、「スタ論」）

私は、難しい問題を解くより基本的知識を確認したかったのだ。予

備校の中でも辰巳法律研究所を選びました。私は、司法試験は点取りゲームであると考えており、スタ論の使用法としては、どこに点数が振られているかを勉強する手段としていました。他の予備校と異なり、スタ論は解説についている採点表のあてはめ部分が個別具体的にっており、逆算して勉強するのに役立つので、とても良かったです。また、スタ論などの点数は何点を取るうが何を書かれようが基本的に気にしていなかったですが、自分が実際に解いてみた自己評価と実際に付けられた点数に乖離がある場合（自分では出来たと思ったのに、点数が低い時は特に注意）は重点的になぜ乖離が起きたのかを徹底的に分析しました。その結果、あてはめ点でござり点を落とすことが多いという分析が出てきたので、答案を書く際はあてはめをより重点的に行うことを注意するなどをしました。辰巳は他の予備校よりかなり値段が高いのでお金に余裕がない方もいらっしゃるとは思いますが、スタ論と全国公開模試は取った方がいいと思います。今高い金払わないで落ちるよりは今払って受かる方が安上がりです。

(3) 全国公開模試

私は、今回が一回目の受験であるので司法試験の会場に慣れること、本番を想定した対策の確認、自分が受験生の中でどのくらいの位置にいるのかを確認するために、全国公開模試を受験しました。そして、私は模試で大失敗を連発しました。例えば、民法の終了時間を間違えて時間配分を完全に失敗したり、民訴法の時間に頭が痛くなり途中で問題を解くのをやめるなど。しかし、結果的には合格ラインの位置でした。この結果から、本番で各科目が模試より少しでも書ければ絶対に受かるという自信に繋がりました。そのため、本番でうまく書けなくても「模試よりは書けてるから、まあ許容範囲でしょ！」とプラス思考でいけました。また、結果は気にしませんでした。失敗した点の対策だけはしっかりしました。先ほどの民法の終了時間のミスについては、カウントダウン方式の時計を追加しました。頭が痛くなった点は、本番では会社法の終了後、冷えピタを貼ると頭痛薬をあらかじめ飲むなどの対策を行いました。

5 受験対策としての特徴的な勉強法

(1) 私は全科目を通して、基本書はほぼ読まず、インプットと問題演習を行うタイプの勉強をしていました。インプットや問題演習で理解できなかったり、不安な部分についてのみ基本書を利用していました。受験勉強は限られた時間をうまく有効活用し、自己の得点を最大化することが最重要であるので、自分の弱点を考慮して、日々どのようにすれば点が取れるのか、どこに点があるのか、どこの勉

ためふさ まこと
為房 麻琴さん

受験歴
 新試験 3回



早稲田大学教育学部
 早稲田大学法科大学院 2010年入学・2014年修了

【受講歴】2016年対策
 スタンダード論文答練（福田クラス/第1・第2クール）
 スタンダード短答オープン（第2クール）、全国公開模試 他

リベンジ合格に至るまで

- 不合格を体験して、合格に必要なことは何かについて深く考えるようになった。
- 不合格だった方は勉強を始める前に、敗因分析に取り組むこと。敗因分析で大事なことは3つある。
- 勉強方法に悩み、指針がほしい受験生には、スタンダード論文答練・福田クラスが本当お勧め。

1 司法試験の受験を決意した経緯

私は、早稲田大学教育学部の出身です。学部では、社会的弱者について学習してきました。この学習の中で、社会的弱者を根本から支援するには、法律を知り、法律を使うことが一番効果的であるとの考えに至りました。そこで、畑違いではありますが、法科大学院に入学し、法曹界での仕事をしていくことを決意しました。

2 法科大学院受験前の学習状況

私は、教育学部では教員免許の取得を目指していたため、必要科目や教育実習に参加していました。教員免許取得に必要な授業と必須科目を学習することで精一杯で、法律科目についてじっくり身になる学習をすることはできませんでした。これは、今後、他学部や社会人等の皆さんが法科大学院への入学を考えている場合へのアドバイスになりますが、法科大学院への入学前に法律科目を勉強しておかないと、入学後に周囲よりも勉強が遅れている状態になるため、一通りで良いので学習しておくことをお勧めします。

3 法科大学院入学後の学習状況

私は、法律科目について初学者の状態での入学したため、法科大学院の授業についていくのが精一杯でした。特に、1年生のころは、授業で使われる用語さえ理解できず、特に全体像が見えていないと理解が難しい民法では、授業中にしどろもどろになっていた記憶があります。また、当時は実家から通っており、一日の通学時間が4時間以上はありました。そのため、勉強に費やす時間も他の生徒よりも少なくなっていました。

2年・3年になると、自分の勉強方法が確立していきました。このころになると、司法試験の過去問を解きはじめましたが、司法試験委員が何を求めているのかへの意識が低かったと思います。そのため、いざ受験のときになると、司法試験委員が何を求めており、それを答案に書いていくということができず、答案を書くことに不安しかありませんでした。

4 合格までの流れ

(1) 合格に必要なこと

私は、不合格を体験して、合格に必要なことは何かについて深く考えるようになりました。私が至った結論は、敗因分析をしっかり行うということです。敗因とあるように、これは再チャレンジする受験者に向けた言葉であるため、初めて受験される方には、自己分析ということになると思います。

司法試験は、合格者人数が決まった試験です。上位合格を目指す人は除外されますが、とにかく合格をしたいのであれば、その年の合格者人数の中に入れてよいのです。そのため、合格に必要なことは何かを知り、自分は現在どこの位置にいて、合格圏内に入るために必要なことは何かを分析し、それを実践することができれば、合格になるのです。よって、勉強を始める前に、敗因分析に取り組むことをお勧めします。

この敗因分析で大事なことは3つあります。1つ目は、主観と客観を一致させることです。主観とは、自分の不安科目や不安な点（知識、書き方、時間配分等）です。客観とは、成績や自己の学習状況を知る知人からのアドバイスです。単に不安感から勉強をしても、それが合格につながるとは限りません。他者からの的確な視点で、現在の自分の位置と合格の位置を結びつけて初めて、敗因分析が意味のあるものになります。2つ目は、敗因分析は科目別にやるということです。科目によって、自分のいる位置が異なることが多く、合格に必要な取得方法も異なるからです。3つ目は、答案から離れた敗因分析は行わないということです。司法試験委員は、答案からしかその人を判断しません。したがって、答案に書かれたことが全てであり、それ以外の要素を持ち込んだ敗因分析は合格に結び付かないからです。

これら3つのことに注意して、敗因分析をすることが合格に必要なことだと思います。

(2) 今年の勉強方法

ア. 全体

勉強方法の1つとして、自主ゼミをすべきであるかについて悩まれる受験生が多いため、まずこの点について書きたいと思います。私は、前回の受験までは自主ゼミ

を組んで過去問を解いていましたが、今年の受験では自主ゼミを行いませんでした。自主ゼミでは、他者との検討によって理解が深まるメリットがありますが、私の場合はそれ以上に時間をとられ、自主ゼミ中の発言に左右されてしまうデメリットが大きかったため、自主ゼミをやめました。その代わりに、書いた答案はすべて、合格者の人に提出して細かなアドバイスを直接受けていました。

また、私は敗因分析を行うことが何よりも重要と考えていたため、分析結果を相談でき、勉強計画を確認してもらうアドバイザーを活用しました。これは、早稲田大学のコミットメントゼミという制度ですが、このような制度がなくても、的確なアドバイスをくれる方に見てもらうことで同じようなことができると思います。

イ. 短答

私は、辰巳の短答過去問パーフェクトを活用していました。辰巳専任講師・弁護士の福田俊彦先生の講座を受講していたため、福田先生のアドバイス通りに、正答率によって区分し、皆が解けるところは絶対に落とさないように意識して勉強しました。また、12月末の時点で、短答が思ったよりも伸びなかったため、辰巳が発行している条文判例本を活用し、周辺知識を定着させることで理解を深めることにしました。この結果、短答は前年度よりも伸びましたので、条文判例本の活用をお勧めします。

ウ. 論文

私は、辰巳の福田先生の講座（スタンダード論文答練・福田クラス）を受講したことが、論文の成績を伸ばし、合格に至った最大の要因だと感じています。勉強方法に悩み、指針がほしい受験生には、本当に受講することをお勧めします。

福田先生の講義が合格に直結したと私が感じて点は2つあります。1つ目は、膨大な知識の中から何が合格に必要なラインであるかを明示してくれる点です。司法試験は、一種の点取りゲームであるところがあります。皆が点を取ってくるところで点を落とすことは不合格につながります。したがって、合格に必要なラインを常に提示してくれることは、合格に直結することです。2つ目は、採点実感や出題趣旨の中から司法試験委員が受験生に答案で書いてもらいたいものは何かについて明示してくれる点です。司法試験は、答案からのみ判断されるため、そこに書く内容を絞ることが大事です。そして、司法試験は書きたいことを書く試験ではなく、司法試験委員が書いてほしいことを書く試験です。この司法試験委員が書いてほしいことは、過去問の採点実感や出題趣旨から判断します。この判断は、自分で行うよりも、受験に精通した福田先生が教えてくれることが確実に合格に結び付くことだと思います。

福田クラスの受講と平行しながら、辰巳が発行する趣旨規範ハンドブックを活用して、知識を正確にアウトプットできるようにしました。覚える場所を、本に同封さ

れているカードで隠しながら毎回テスト形式で暗記していました。また、直前期には、辰巳のハイローヤーにも目を通して、他の受験生が注目している論点を自分が落とさないようにしました。

過去問は、福田先生が勧めてくれた通りに3年分を確実にやることにしました。私は答案をたくさん書くタイプではなかったため、この3年分を書き、それを全て合格者にみてもらっていました。1通を複数人に出し、自分が納得いくまで質問しました。いただいたコメントは全てノートにまとめ、このノートには辰巳の答練で書かれたコメントを追加していました。自分が答案で出す癖は、簡単に直るものではありません。そのため、ノートで癖が直っていないことを書き、自分に本番でも出したら落ちると言い聞かせていました。本番直前にも確認し、やってはいけないことは何かを頭に叩き込みました。本番では、全てを守れたわけではありませんが、癖を減らすことができたため合格につながったと思います。

5 最後に

受験生に対するアドバイスとしては、重複になりますが、敗因分析を確実に行うことと、迷っているならば福田先生の講義を受講することです。私の体験談と被るところがある方は、ぜひ参考にしてみてください。

辰巳法律研究所 受講歴

2016年対策

スタンダード論文答練（福田クラス / 第1・第2クール）

スタンダード短答オープン（第2クール）

全国公開模試

福田クラス直前フォロー答練

きぬい なつみ
絹井 夏実さん中央大学法学部
千葉大学法科大学院 2011年入学・2013年修了【受講歴】2016年対策
スタンダード論文答練（第1・2クール）
全国公開模試 他受験歴
新試験 4回

過去問を潰しつつ、運氣とチャンスを掴め！ 受験回数が多い者勝ち！3,000番抜くのは奇跡ではない！

- 2回目の不合格後、福田俊彦先生の一言で論文過去問検討の重要性に目覚めた。
- 司法試験の出題傾向や試験委員が重視しているポイントを知らずして戦うのは、丸腰で戦地に赴くのと同じ。
- 受験回数が多い人ほど幸運が巡ってくる確率が高くなる。

1 司法試験の受験を決意した経緯

小学生の時、ふとしたきっかけで刑事事件に興味を持ち、弁護士という職業の存在を知りました。刑事弁護をすることに憧れ、その大前提として司法試験を目指すことは自然の成り行きでした。

2 法科大学院受験前の学習状況（法律学習）

法学部入学後から旧司法試験受験対策を開始し、卒業後からは辰巳法律研究所の講座を受講しながら最後の旧司法試験まで受験を続けました。その後、旧司受験対策を応用して、法科大学院を受験しました。

3 法科大学院入学後の学習状況（法律学習）

日々の授業についていくのに必死で、明日の授業の予習をすることだけで2年間はあっという間に過ぎてしまいました。夏休み後に定期試験があったため、長期休暇も司法試験対策に充てることができず、とにかく留年せずに卒業することを目標とせざるを得ない、情けない状況でした。

4 受験対策としてとった辰巳講座と使用した本

旧司受験時代より、その本試験予想問題的中率より辰巳に絶大な信頼感があり、新司法試験対策も辰巳の講座を受講してきました。以下、改良を加えながら過ごしてきた合格への道筋を順に述べていきます。

（受験1回目の対策）

3年生の秋には司法試験対策に対する焦りが生まれ、スタンダード論文答練（スタ論、第1クール・第2クール）、スタンダード短答オープン（スタ短、第1クール・第2クール）、全国公開模試を受講しました。もっとも、法科大学院のカリキュラムに忙殺されてスタ論・スタ短を欠席することも多く、復習もほとんどできず、本格的に受験対策を始めたのは卒業後のわずか2か月でした。

⇒1回目の結果：短答不合格。

（受験2回目の対策）

短答合格が最優先課題だったところ、憲法と民法は旧司受

験時代に潰してきた旧司短答過去問で培った知識で、ほとんど対策をせずに高得点をとることができました。ここでは刑法の得点の上げ方についてのみ述べます。友人の助言で直近3年分の過去問を解いたところ、安定して点数をとれるようになりました。今思えば、短答刑法は比較的過去問と似た肢が出題される傾向にあるからかと思います。

論文過去問については「過去に出た論点が出題されることはない。」と誤った考え方をしており、一切触れませんでした。

この年はスタ論・スタ短・全国公開模試の問題を復習しただけでした。

⇒2回目の結果：短答合格。論文3200番台。

（受験3回目の対策）

2回目の不合格後、何かの折に辰巳専任講師・弁護士の福田俊彦先生が仰った次の一言で論文過去問検討の重要性に目覚めました。「大学受験において、まずは志望校の過去問を潰すことが一般的だ。だとしたら同じ受験である司法試験においても、まずは過去問を潰すべきである。」

司法試験の出題傾向や試験委員が重視しているポイントを知らずして戦うのは、丸腰で戦地に赴くのと同じです。この気付きの日から、新司法試験過去問を全部潰すことに全力を注ぎました。

そこで大変役立ったのが、辰巳の『司法試験論文過去問ライブ解説講義本』シリーズ全巻と『論文全過去問集ドーピング本』民法・行政法でした。この時点で9年分も溜めてしまった過去問を効率的に潰すのに、これらの本なくしては達成できませんでした。これらの本には問題と模範解答のみならず、出題趣旨・採点実感・ヒアリングが完全掲載されており、及びライブ解説講義本には著名な学者の方の解説と答案の書き方指南が載せられています。

中でも、木村草太先生の憲法のライブ解説講義本は優れた御本でした。私は旧司時代に流行したいわゆる「論証パターン」の悪影響をもろに受けており、法科大学院在学中から答案作成の仕方に苦慮していました。木村先生の御本は憲法答案の書き方を手取り足取り解説してくださったもので、試験委員が求める答案を書く力を身につけることができました。

ほとんどは答案を書かずに答案構成をするに留め、全科目、9年分を検討していきました。

その他、辰巳は本試験問題予想的中率が高いので、スタ論・

スタ短・全国公開模試の問題を2年分、復習しました。

⇒3回目の結果：短答合格。論文3400番台。

（受験4回目の対策）

過去問を潰したにもかかわらず、順位を落として不合格に愕然としました。自分の能力の限界を突き付けられた気がして、受験を続ける気力を失いました。

しかし、不合格の理由は明白でした。一つは刑法で成立する罪について全然違うものを書いてしまったこと（刑事系はわずか67.82点でした）。もう一つは予備試験の過去問を潰さなかったことです。

3回目の受験対策中、偶然に何問か予備試験の論文過去問を目にすることがあり、それが司法試験でも見たことがある論点を問うているという印象を持っていました。ゆえに予備の過去問も検討する必要性をわかってはいたのですが、手が回りませんでした。

自分の全てを出し切ったつもりでいましたが、こうも改善点が思いつくということは、まだまだ限界ではないのではないかと。そう思い直し、4回目の受験を決意しました。不合格のショックから立ち直れない中、手始めとしてまずは問題文が短くてとつき易い予備試験の過去問を検討することでリハビリを行おうと、辰巳専任講師・弁護士 金沢幸彦先生の『予備試験本試験過去問答練』を受講しました。

この講座では、合格答案と不合格答案の比較を中心に過去問の検討が進められるので「何を書かないと評価されないのか」を把握することができ、大変有意義でした。また、要件事実論が弱かった私にとり、実務基礎科目の過去問検討も大いに役にたちました。

その他に、この年の合格者から次のアドバイスを受け、実践しました。それは、短答で一定の点数がとれているなら本試験直前まで対策をせず、そこで浮いた時間を論文対策につぎ込むことです。

私は例年と異なりスタ短は受講せず、短答対策は新司総括と全国公開模試の復習、及び超直前期に直近3年分の過去問を回すことしかしませんでした。論文対策は予備試験の過去問全てと直近3年分の司法試験過去問の検討、直近2年分のスタ論・全国公開模試の復習を重点的に行いました。司法試験論文過去問を直近3年分に留めたのは、①前年に全て回したこと、②時間不足、③受講していませんでしたが福田俊彦先生のスタ論福田クラスでは3年分しか扱わないことを見て、3年分で充分なのだったこと、によります。ただ、刑法で再びミスすることを防ぐべく、スタ論で扱われた問題とリンクする過去問を追加的に検討し、結果刑法のみほぼ全ての過去問を見直しました。スタ論の良いところは、単に本試験出題予想をするだけでなく、過去問で問われた重要論点の復習もできるような出題もしている点にあります。

⇒総合400番台で合格。もっとも、短答の順位は昨年より落ち、2700番台。

5 受験対策としてとった「私のノート作成自慢」

短答で一度間違えたところは、5回6回と間違えます。何回知識を入れ直しても、個々人の思考の癖がそうさせるのだと

思います。そこで、旧司受験時代から短答で間違えた知識をノートにまとめ、電車の中や空いた時間に繰り返し見返していました。最終的に小さいノート4冊になりました。どこをめくっても自分の弱い点しか書いていないこのノートは、判例六法を回すより有意義だったと思います。

6 自己の反省を踏まえ、これから受験する人へのアドバイス

私は過去問を検討した以上、とりたてて特別なことをしていません。ではなぜ3000番以上も成績を上げることができたのか。それは今年の出題が私にとって書き易い内容が並んだからなのだと思います。勿論、試験場で今年の問題が簡単だったとは感じていません。例年同様に苦しみました。ただ、刑法で致命的なミスをするでもなく、無事に全科目を乗り切ることができた幸運に恵まれたのだと思います。

三段論法を守り、適宜あてはめを行い、適切な結論を導き、時間内に書ききること。これは知識の有無・書き方の功劣にもよりますが、福田先生がよく仰る「実質的意味の受験生」間には、ほぼ差がないのだと思います。その時の体調や思考の癖、事前に勉強したところか否か…そのような運にも大きく左右されるのだと痛感しました。

ですから、受験回数が多い人ほど幸運が巡ってくる確率が高くなるわけです。また、過去問を検討していさえすれば、知識も技術も無意識のうちについてきます。何回も涙をのまれている方、どうぞ肩を落とさないでください。環境が許してくれるのであれば、受験を続けてください。そして幸運を掴んで下さい！！！！

また、受験が長引くと友人たちと疎遠になったり、悲しい思いをすることが増えると思います。私は、心無い友人や無神経な友人とは一切連絡を断ち切ることで心の平穏を守ってきました。そして、朝6時30分には自習室に向かい、夜は0時前に眠るという朝方の生活に改めました。病気になるまいや、9月頃からは必ずマスク着用で外出しました。このように心身共に健康であることを心掛けたことも合格の要因かもしれません。

拙い体験記になりましたことをお許し下さい。皆様の合格を心よりお祈り申し上げます。

辰巳法律研究所 受講歴

2016年対策

スタンダード論文答練（第1・第2クール）

全国公開模試

司法試験総括

予備試験本試験過去問答練（第1・2クール）

2015年～2013年対策

スタンダード論文答練（第1・第2クール）

スタンダード短答オープン（第1・第2クール）

全国公開模試

はしもと たくと
橋本 卓斗さん受験歴
新試験 1回一橋大学法学部出身
2015年予備試験合格【受講歴】2016年対策
スタンダード論文答練（第1・第2クール）
スタンダード短答オープン（第1・第2クール）、全国公開模試

司法試験を短期間で合格するには

- 原孝至先生の基礎講座で答案の書き方の基本を身に付けた。
- より実践的な紛争解決能力を磨くには、ひたすら問題演習を繰り返すしかない。
- 司法試験の合格に直結するのは知識の量ではなく、最低限の知識を試験本番でいかに使いこなせるかという点である。

1 司法試験の受験を決意した経緯

私が明確に法曹を志望するようになったのは、学部2年の時に法律実務家の講義を聴講した時です。法学部に進学するときには、いまだ法律家については漠然としたイメージしかもっていませんでしたが、講義の中で弁護士をはじめとする実務家の経験談を聴いて、よりよい社会のため、そして自分の正義と信念のために働く弁護士にあこがれを抱くようになりました。この経験が私に司法試験受験の決心をさせてくれた契機だと思います。

2 予備試験合格までの学習状況

私が本格的に法律の学習を始めたのは学部2年のときです。1年のときは、大学の講義を聴きながら指定された基本書を漫然と読み進めていましたが、2年に進級してからは後述のように辰巳専任講師・弁護士の原孝至先生の基礎講座を受講し、約1年間で基本7法の概要を学んでいきました。講義を聴き、漫然と基本書を読む1年のころとは違い、基礎講座では早い段階から演習問題を扱い、答案の書き方の基本を身に付けていきました。当時サークル活動やアルバイトなどで時間が取れない時もあり、講義を聴いて内容を軽く復習するだけで精一杯でした。

基礎講義の受講後は辰巳の予備試験スタンダード論文答練を受講し、より本格的な演習に取り組むようになりました。受講当初は、問題に対してまともに解答を書くことができなかつたのですが、わからないときはその都度基本に立ち返って基礎講座のテキストを何度も参照するうちに基本的な知識は自然と身に付くようになりました。そして、どんなに問題が難しく手も足も出なくても、テキストなどを参照しながらでも欠かさずに答案だけは書くよう心がけていました。

徐々に論文問題の答案が書けるようになると、今度は試験時間内に答案を書く練習を繰り返しました。大学のゼミやクラスの仲間と自主的にゼミを組み、時間内に解答を仕上げる訓練をし、さらに互いに添削することで法律的に間違いがないか、読みやすい文章になっているかを常に意識しながら答案を作成するようにしていました。

短答対策としては辰巳の予備試験スタンダード短答オープンの問題を何度も解きました。暗記があまり得意ではない私は、受験生の正答率を参考に重要な知識を判別し、優先的にインプットしていきました。

3 予備試験合格後の学習状況

予備試験と比べると、司法試験の問題は問題量・解答量・試験時間のすべてが倍近くあり、予備試験とは少し違った力が問われているように感じました。つまり、求められる条文や判例の知識は予備試験とは大して変わりませんが、問題文をいかに素早く正確に読み込んで、いかに効率よくポイントとなる事実を拾い、評価を加えて結論を導くかという、より実践的な紛争解決能力が求められます。こうした能力を磨くには、ひたすら問題演習を繰り返すしかないと思い、予備試験後も辰巳のスタンダード論文答練（スタ論）を受けました。司法試験は予備試験よりも時間的・分量的に厳しい試験なので、それまでよりも解答時間を順守して途中答案にだけはならないよう論文を書く訓練をしていきました。

また、予備試験受験前は予備試験の過去問を解いておらず、前年と似た出題形式に困惑してしまうことがあったので、司法試験に向けては過去問の検討をしっかりと行おうと決めていました。過去問の分析としては、辰巳の「ぶんせき本」を利用して約5年分の問題を検討しました。予備試験合格後から司法試験まで約6か月とあまり余裕もなく、答練講義でも実際に答案を書いていたことから、実際に答案を書いたのは各年度2・3科目のみでしたが、答案構成だけはすべての科目について欠かさずに行いました。限られた時間の中で効率よく過去問演習をするならば、自分の苦手科目（私の場合は憲法）や、現場で試行するタイプの問題を中心に答案を書くのが良いと思います。そして答案を書いた後は、ぶんせき本の再現答案と比較して、どの設問がどの程度書けているか、どのように書けばより読みやすくなるかを自己分析していました。再現答案には再現してくださった受験生の順位も載っています。その順位をもとに合格ラインの答案を細かく分析し、合格するためには何をどの程度までかければよいかを常に意識しながら演習をしていました。

短答対策としては、論文と同様に辰巳のスタンダード

短答オープン（スタ短）を受け、予備試験のときのように重要な知識を優先的にインプットしていきました。予備試験とは異なり、憲民刑の3科目のみなので、より狭くかつ深くまで学習していました。とくに民法は3科目のうち一番範囲が広く、必要な知識も多いので、基礎講座のテキストなどの図や表をうまく利用して記憶しました。あとは、予備試験では手薄だった条文について、憲法の統治機構や刑法をしっかりと確認するよう心がけました。

最後に、司法試験と予備試験との違いでもっとも大きいのは、選択科目の存在です。予備試験からの約6か月でさらに1科目勉強し、試験で解けるようにするのはとくに学部生にとっては大変だと思いました。そのため私は、学部時代に労働法の講義を受けて一通りの知識があったことから、労働法を選択しました。すでに予備知識があったおかげで、労働法の基本知識はおおまかに確認するだけでスムーズに論文対策へ移ることができました。論文対策としては、実際に辰巳の「えんしゅう本」で基本的な論点を確認しながら百選などで知識を補い、一通り論点を把握したら「事例演習労働法」を使ってより応用的な演習問題を検討していきました。この2つはどちらかという試験でどこが問われやすいかを把握するために内容を確認する程度で利用しましたが、実際に答案を書くのを念頭に置き問題を検討したのはやはり過去問でした。労働法の問題は比較的基本的な問題が多かったので、答案を書かずに答案構成にとどめ、実際に答案を書くときのイメージを固めました。

4 辰巳講座の利用方法とその成果

前述のとおり、私は学部2年のときに原孝至先生の基礎講義を受講しました。この講義で扱った演習問題には司法試験の過去問も含まれており、各法律の基本事項を学びながら、本番の試験で何がどのように問われ、それに対してどのように解答していけばいいのかイメージを持つことができたのが、学部在学中の予備試験合格の一番の要因であったと思います。

その後は予備試験、司法試験ともにスタ論とスタ短を受けて、問題演習を数多くこなしました。辰巳の問題を解いてみて思ったのが、過去問だけでは不安であった演習量を十分すぎるほど補うことができ、さらに試験本番での出題可能性が高い問題が散りばめられていることです。実際に対策が遅れていた予備試験の実務科目では、答練で解いた問題と類似の問題が出題されました。試験直前に答練の出題内容を再確認しておくのがよい活用法だと思います。ただ注意したいのは、試験本番では答練の問題通りに出題されるとは限らないので、解答を丸暗記するのではなく、あくまで知識の確認程度にとどめるのが良いと思います。

5 私がやって成功した方法

これまで見てきたように、私の勉強法は問題演習中心で特別なものはあまりありません。ですが、問題演習だけでは知識の不足を感じるがよくありました。そこで私がやっていたのは、基本的な知識をテキストなどで確認するときは索引を使わずに自力で該当箇所を探し出すことです。今自分が知りたいのはどの分野のどの範囲なのかを意識すること、そしてその周辺の知識も頭に入れることができるので、基本書やテキストなどで知識を確認する際は一度やってみるとよいと思います。

6 私が使用した本（辰巳）

私は、知識の確認として民事系・労働法の「趣旨規範本」、論点の確認として労働法の「えんしゅう本」、短答知識の確認として「肢別本」、そして過去問演習・再現答案分析のために「ぶんせき本」を使用していました。とくに「趣旨規範本」は適宜自分で情報を補って、試験直前に短時間で確認できるようまとめていました。そして問題演習として欠かせないのが「えんしゅう本」でした。再現答案が多く掲載されていたので、合格ラインを把握するために重宝しました。

7 これから受験する人へのアドバイス

私は、ロースクールを経由せずに比較的短期間で司法試験に合格しました。これは決して、私が暗記が得意だったからではないと思います。私はどちらかという暗記はあまり得意ではないです。ではなぜか。それは、勉強開始当初から予備試験・司法試験の問題では何が求められているかを常に意識して、問題を解き解答を書くことを習慣としてきたからだだと思います。司法試験の合格に直結するのは知識の量ではなく、最低限の知識を試験本番でいかに使いこなせるかという点だと思います。司法試験合格を目指す皆さんも、ぜひ知識詰め込み型の勉強ではなく、試験本番を意識した問題演習中心の勉強をしてみてください。

辰巳法律研究所 受講歴

2016年対策
スタンダード論文答練（第1・第2クール）
スタンダード短答オープン（第1・第2クール）
全国公開模試



4か月で合格レベルに。 教材が豊富な労働法を効率のよい勉強方法で。

- ✔ 教材が豊富なため、努力の方向性を誤る可能性が低い。
- ✔ 教材をこなせば安定して高得点が取れる。
- ✔ 選択科目集中答練を受講しているだけで相対的に有利に立てる。

1 労働法を選択した理由

選択科目を選ぶにあたって私が考慮した点は、①教材が豊富な、②同期や先輩に選択者が多く、情報が手に入りやすいか、③将来実務で役に立ちそうか、といったことでした。この3つを考慮すると、私の中では労働法か倒産法の2択に絞れ、また学部で唯一履修したことのある選択科目が労働法だったので、私は労働法を選びました。結果的に、受験対策の過程で労働事件に興味を持つようになり、将来専門分野の1つにできればと思うようになりましたし、試験的にも得意科目でできたので、労働法を選択してよかったと思っています。

2 労働法を選択するメリットとデメリット

労働法を選択するメリットには、まず上述のように、教材や情報が豊富であり、修習や実務で役に立ちそう、という点があります。また、論証集や過去問を研究した教材といった、司法試験労働法対策に特化した教材が豊富なため、努力の方向性を誤る可能性が低いです。労働法は暗記事項が多いですが、試験で問われる知識が載った教材をこなさえすれば、何ら特別なセンスがなくとも安定して高得点が取れる科目だと思っています。

逆にデメリットとしては、他の選択科目に比べて覚えることが多い点です。労働法は重要判例も多く、覚えるべき規範や考慮要素が多いため、暗記は不得意な方には不向きかもしれません。ただ、私は後述のように、辰巳の講座で載いた論証集のみを使用して教材を1つに絞ったことで、合格に必要な知識を効率良く勉強できたので、予備校を上手く活用すれば半年で合格レベルまで持っていくことは十分可能だと思います。

3 予備試験合格後の学習状況

予備試験合格後は、ロースクール入試対策や大学の期末試験に向けた政治系科目等の勉強に追われ、労働法の勉強を本格的に始めたのは1月中旬でした。労働法は3年生の時に大学で履修しましたが、ほぼ何も覚えていなかったため、1、2月は労働法のインプットに最も時間を割きました。具体的には、後述の辰巳のDVD講座を利用して、自作の論証集にまとめる作業をしていました。また、1月末から選択科目集中答練にも週1で通い始めましたが、最初のうちはインプットが追い付かず、焦りながら毎日労働法の論証集を読み続けていました。2月末になってやっと知識が定着してきたため、その後は労働法に割く時間を減らし、定期的に論証集を読んで復習するにとどめました。

4 具体的な受験対策

(1) 勉強方法

私が約4ヶ月で労働法を合格レベルまで持って行けたのは、ひとえに2014年度労働法1位合格者による合格者講義のおかげです。テキストはかなり分厚く、司法試験労働法の問題を解くにあって必要な知識は全て詰

め込まれていました。多くの文献を参照した上、よく練られて編集されたテキストだったので、私は講師を信じ、他に基本書や演習書を使うことなく、このテキスト1冊のみをひたすら繰り返しました。その際、テキストがあまりに分厚く持ち運びにくかったことや、論証部分が点在していて暗記しにくかったことから、解説も付した上で論証をまとめ直した論証集をWordで作りました。この作業には1ヶ月ほどかかりましたが、まとめた論証集ができた後は勉強の効率が一気に増し、これを毎日読み続けて知識を定着させました。

また、辰巳では選択科目集中答練も受講し、週1回答案を書く練習をしました。選択科目は、旧司からある7法に比べて問題演習の教材が少なく、演習の機会が不足しがちなので、選択科目集中答練を受講しているだけで相対的に優位に立てると思います。この答練と全国公開模試を併せて、選択科目の問題演習の機会は10回ほどあり、時間配分や4枚分の答案用紙の使い方のシミュレーションが十分にできました。

私が労働法対策に用いたのはこの2つだけです。勉強を始めるのが遅く、7法の復習・アウトプットも急いでしなければならない状況だったので、1、2月を集中的に労働法に捧げた後は、その間に作った資料を繰り返し読んで記憶を維持させるにとどめました。結局基本書や演習書を使わずに本番を迎えることになってしまいましたが、こんな勉強方法でも70点が取れました。辰巳を最大限に活用しただけで、他に特別なことは何もしていませんが、短期間で得点源科目にすることができました。合格者講義と選択科目集中答練は、選択科目に割く時間が十分になく、効率的に勉強したい方にぜひおすすめしたいです。

(2) 使用した本

辰巳の『趣旨規範ハンドブック』は労働法受験生の大半が持っている本なので、未知の重要論点をなくすべく、合格者講義のテキストに載っていなかった論証や考慮要素をチェックし、自作の論証集に適宜付け加えていきました。

5 これから受験する方々へのアドバイス

選択科目は8科目中最初の科目なので、そこで感触が良いと余裕をもって次の科目に臨めます。予備試験合格後、一番時間を割いた科目は選択科目でしたが、その価値は十分にあったと思います。ただ、選択科目も論文科目全体のうちの8分の1にすぎないこともふまえて、勉強時間のバランスには注意すべきだと思います。特に労働法や倒産法は教材や情報が豊富なため、効率的に勉強する方法を見つけ、基本事項の習得・過去問研究をしっかり行いさえすれば、きっと大丈夫です。

当パンフレットの内容に関しては、
資料をご請求の上、ご覧ください。